

野市あはれこけ

第13号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市三宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-558-1560

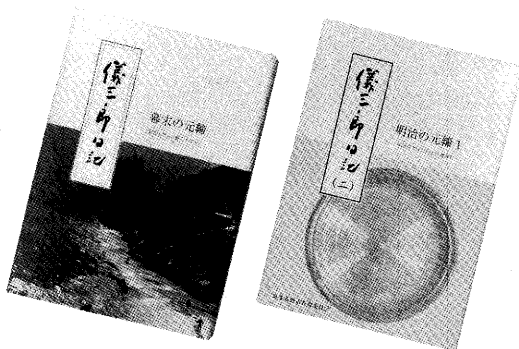
「儀三郎日記」全五巻の語るもの

五日市古文書研究会代表 石井道郎

はじめに

「儀三郎日記」とは、もと西多摩郡戸倉村星竹（現あきる野市戸倉）農林業黒山儀三郎（1833天保4～1912明治45）の書き残した日記で安政6年10月1日より明治41年5月31日まで正味50年に亘る。原本は横半帳13冊。この50年を10年ごとに分割、解説して解説・脚注を附して出版したが、この程第五巻を発刊することによって全作業を完了した。

解説には、石井を責任者とする五日市古文書研究会（最終期の会員は清水浩、清水菊子、大澤恵吉、溝口重郎、増田淑美の諸氏）が当たり、解説は石井、脚注はこれも会員の援助を得て石井が附した。所要期間凡そ10年。



「儀三郎日記」と「儀三郎日記(二)」

日記の内容は、儀三郎の業務日誌兼身辺雑記録であるが第一巻・第二巻は集落生活や行事に詳しく、三・四・五巻は取引や経済動向に重点が移る。民俗学的資料とし

てみるなら一・二巻を、家産増殖の過程をみるには三・四・五巻をお薦めする。あわせて日本近代史の骨格を捉えている。

1. 集落生活の実態

星竹は戸数22戸、金比羅尾根が秋川に迫った山裾・川添の小集落であるが、秋川はこのあたりから川幅をひろげ、筏を組む土場ができるようになった。この集落は直接・間接筏商い（木材出荷）に依存する者が殆ど中には富裕者が出た。後に儀三郎もその一人となるが、第一巻（幕末期）第二巻（維新时期）頃の青壮年儀三郎は資金にも恵まれず、裸一貫で元締を張っている最中ともいえた。彼の家は組頭家（明治に入って代議人）で集落の顔であったが年齢的にも長老格ではなく、実質的な世話役であった。この頃彼が日記に村（ムラ）と書けば星竹を指し、戸倉村すらよそであった。

彼の生活圏は星竹を全宇宙とし、そこに展開する日常生活は江戸時代以来連続とつづいてきた集落生活であった。日記によってそれを整理してみよう。

(イ) 冠婚葬祭

「冠」は帯解きや元服をさす。儀三郎は長女おふきが七才のとき赤飯を集落の全戸に配った記載がある。気張ったものだと思ったが、日頃から集落一体の習慣があるのでどこで区切るといってもかえって困るのであろう。なお、元服は現代の成人式に当る。「冠」は現代の七五三より広い意味をもつ。

「婚」は結婚であるが、原則として集落の顔役が家の釣り合いを見計らって仲介する。媒酌人の役は極めて重

く結婚後のゴタゴタも裁く。大家族で家も狭く不満は山ほどであろうが、女独り自立することの不可能な社会が抑止力として働くのか離婚は殆どない。儀三郎と母イチが仲介に立つ例が多く、恐らく集落一であろう。なお養子・養女も「婚」に含まれるが、これは後述する。

「葬」は葬式で公平な当番制、顔役でも穴番（墓穴掘り役）が当る。

「祭」は氏神神明社（森という）の祭礼の他「獅子舞」「寅祭り」「天王祭り」がある。子供達は小中野村の子生神社、五日市村の阿伎留神社祭礼も数に入れている。祭りは集落生活のハレの日であり、勤労にあけくれる日常の代償となる日である。若い男女の交際も祭りの夜は大目にみられる。



晩年の儀三郎・おりん夫妻（黒山家所蔵肖像画）

(口) 連帯作業

屋根替え・田植え・麦まき・道路普請・橋懸け等

日記の冒頭（安政6）が儀三郎家の屋根替えで、両隣りとお前（屋号）の三軒から手伝いがみえている。星竹地区は麦藁屋根だから四年たてば手直しを要する。4軒で四年に一遍ずつ手をかけるということは戸ごとに言えば毎年どこかの家の屋根直しということになる。その際の麦藁や縄の貸借は克明に覚えられ、麦藁の借りは麦藁で返すことになる。黒山家では明治中期にトタン葺きに変えた。共同屋根替えから脱けたことになる。うるわしいと見られた集落の互助作業も貧困への共同対策という面があった。

(ハ) 講

大山・伊勢・榛名・聖徳太子・水神・念仏（男・女）・頼母子等

講には信仰に発するものが多いが、実質的には旅行の積立講であったり、代参講であったり、一夜の飲食講で

あったりする。聖徳太子は^{そま}杣の親睦会であり、水神講は筏乗りの会である。儀三郎は一升下げて両方に出る。最も熱心なのは女念仏講で、会場持廻りで毎晩のように念仏を唱えた。講は自由意志で運営される建前だが、集落社会の交際の根幹であり、集落に住む以上数多くの講に所属することになる。

(二) 病氣見舞（重病者）

神託・おこもり・川ごり・お百度参り等

医者が見放したような重病人がでると近所では親睦に応じ、それぞれの方法で神だのみをする習慣がある。神託はおみくじを^ひ抽くこと。おこもりはお堂や祠に泊り込む。川ごりは川につかり心身を清め快復を祈る。お百度参りは回を重ねて特定の寺社等に詣でるのだが、今熊山のような手間のかかる所はそれなりの評価をうける。病家の側からすればそれなりの借りを生ずる。お前のエイ殿が重病の時（亡くなる）儀三郎の弟兵次郎が今熊山へお百度参りをした。その後兵次郎が大病（快復）した時お前では今熊詣でをして報いている。ここにも屋根替えの麦藁に似た貸し借りが成り立っているのである。

(ホ) 日待

農作業、山仕事等の始め終わりに行う日待・社交的な日待（招客）・内日待（一家内で行う内祝）・親睦を目的とする仲間日待等

儀三郎のような元締は山仕事の始め、区切りに必ず日待をする。日待は酒が入ることで生活や労働にリズムを与える。勘定日には日待を兼ねることが多いが支払った賃金以上に働き手に慰労と謝意を伝えることになり、人使いの特効薬ともなる。日待は現代のように曜日制のない時代の人間が生んだ生活の知恵で、起源は限りなく昔へ遡るであろう。

(ヘ) 娯楽

芝居・相撲・人形浄瑠璃・^{さいもん}祭文・ちよぼくれ・幻燈・ごぜ等

祭りに呼ぶ小屋掛け芝居や、伊奈村等で行う相撲興行などは別として、一般に門つけ^{かど}芸人達が小人数のグループで小集落を訪問する。星竹では見世やお前がよく会場になった。十里木・落合とつたわってくる芸人を待ち兼ねるように村人が集まった。ごぜは儀三郎の家を定宿として遠い異郷の歌を唱った。彼らは集落の人々に様々な刺戟を残して去ったが文明開化の進むにつれ、こうした門つけ芸人の訪れは少なくなった。

集落生活にはまだ天候により「雨乞い」の行事などもあるが、これにはどうしても大久野の白岩の滝の水をと

って来て秋川の精進淵へ注ぐという行事をとまなう。これは先祖より伝えられた雨乞いの方法なのである。

伝統思考と集団思考は集落を代表する二つの有力な思考法である。集落は個人を庇護し安住の場を与えてくれるが、その個人が周囲と無縁な個として行動することに対しては決して寛容ではなかった。

2. 家の実態

厄介おじと養子・養女の問題

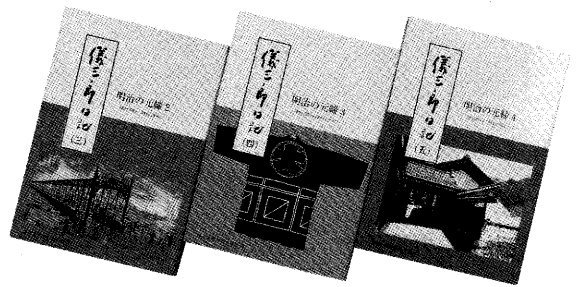
集落生活から目を転じて当時の家の生活をのぞいてみよう。星竹の戸籍（明治10年戸主書上げ・上田家文書）から基本的な数字を探ると一戸当り家族数は最高9名から最低3名、全22戸の平均5.9となる。また世代の内訳は三代（祖父母・父母・子）に亘るものが14戸、二世6戸、四世（曾祖父母を含む四代に亘るもの）が2戸となっている。現代のように独居老人などはなく、すべて家族の中に包み込まれている。そこには当然ながら傍系家族もふくまれているが、戸主から見て叔父叔母、また戸主の兄弟姉妹のうち高齢者、一応30歳以上を抽出してみた。該当者のいるもの7戸（男4名、女3名）が数えられたが、このうち男3名は星竹の富農とされる寺向・お前・西（儀三郎家で該当者は弟兵次郎）に居ることがわかった。（残った男1名は養子ゆき遅れ）これは富農には田畑山林等があり、男子の労働力を必要とするからである。いわゆる厄介おじなどといわれる傍系男子を手許におくことは贅沢なことであり、貧しい一般家庭では次三男は口べらしのため一刻も早く追立てられるべき存在で、彼らは年季奉公なり養子の口を探して早々と出てゆく。

富農に残された男達の行く末を調べてみよう。兵次郎は大人しく素直な弟で、兄儀三郎の意志のままに働き抜き、やっと結婚できたのは42歳の時、それも20歳そこそこの長男（彼にとって甥）太郎吉が結婚した後であった。もっとも寺向・お前の厄介おじが最期は独身のまま納屋で死亡したのをみると兵次郎が結婚し分家できたのは当時としては破格のことであつたらう。目を覆いたくなるような長男と次三男の格差は第一次産業（農林漁）の低生産性社会に生きる限り致し方ないものであろうか。

さて養子の問題であるが、前掲明治10年の資料には男の子がおりながら養子をとる家が多い。これは明らかに年季奉公人扱いの養子でただの労働力として迎えられたものである。前出の出遅れ養子の男は第5巻で養子先

の川口の農家の納屋で首を^く縊って死んだ。結局一生結婚も出来ず死んで始めて星竹の生家へ戻された。「儀三郎日記」には首縊りが多く出る。中には兄を切り殺し自分も腹を切った弟もいた。社会の矛盾が隠し切れずに顔を出す。もっとも娘だけの家へ後取りとして迎えられる幸運な男、賀養子もいるが数からいえば少ない。当時は養子の離縁が夫婦の離婚より多いことも養子問題を考える端緒となろう。

次に女子について、冒頭の傍系の3名は貧富の問題ではなくそれぞれに女性としての不運・不幸を背負った者ばかりであった。最後に養女の件で、儀三郎が扱った一例を取り上げよう。明治4年2月に親戚の筏乗り周蔵が急逝した。残された者は妻おもん、17歳の長女おしな以下15歳の長男他弟妹多数であった。日記によれば儀三郎は二年待って19歳になったおしなを近村の年輩の富裕な男性に養女として差出し、25円を受取って母親おもんに渡している。この時おしなは狐つきになり檜原から占師が呼ばれたりしたが、思うにおしなの運命に対する精一杯の抵抗と受取れる。儀三郎はおしなのその後の様子を周蔵の弟久二郎に見届けさせている。彼儀三郎もいやな役廻りを誠意をもって果たしたものであろうが、それにしても狐つきとは誰がつけた知恵であらうか。



「儀三郎日記」(三)・(四)・(五)

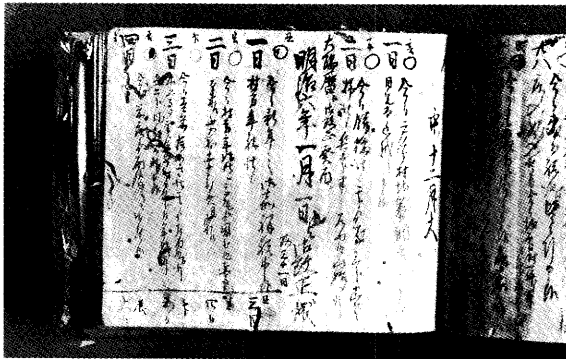
3. 儀三郎はどうして成功したか

第三巻に松方デフレの状況がでてきている。西南戦争等によってふくらんだ不換紙幣を緊縮財政と増税によって回収、インフレにとどめを刺したのはよいが、米・生糸は半値となり、秩父事件のような武装蜂起まで惹き起された。

松方デフレは明治16・17・18年が最盛期というが、明治政府の方針が「国民大衆の生活向上を犠牲にしても財政の余剰はあげて軍備に充てる」というのであるから、

国民の怨嗟にかかわらず不況はつづいた。ところでデフレ期といってもすべての商取引が休止状態になるわけではなく、流通量が細る分だけ業者が選別されるのである。儀三郎はコストのかからぬ筏の上荷に目をつけ、実用品の炭・杉皮を運んだ。また低賃金の木挽を集め板貫類を量産これまた上荷とした。儀三郎の上荷はよく売れた。

(木挽き板の量産については太郎吉の時代に水車製材工場建設となって実を結んだ。) 儀三郎の幸運は田尻の土場についてもいえる。田尻土場は折紙つきの優良土場で増水しても材木の木揚げの便がよく流木の被害が少なかった。流木によって産を失い廃業する元締が出るなか儀三郎はよその元締の筏組立やその川下げを請負った。筏乗りの手も揃っていた。彼の商法は堅実で不況に強い。むしろ不況を利用した。彼は山を安く買い、低賃金労働者を使ってそれを育てた。畑の売手も多かった。また彼は明治20年頃より積極的に金を貸した。



日記の一部で明治5.12.3より6.1.1に移る頁
(旧暦より新暦に移行)

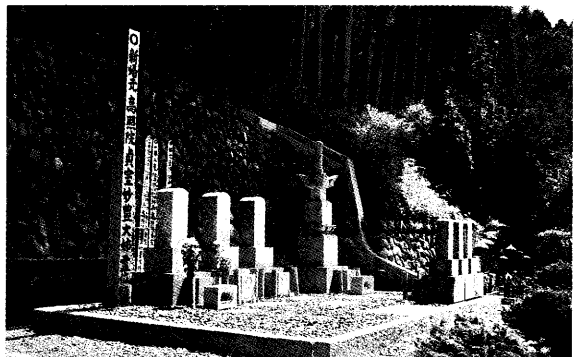
景気は日清戦争のおかげで26・27・28・29年と好況、彼も材木を売りまくったが30年から一転して不況に転じた。国民の経済力の底が浅いというか過剰生産を消化しきれない。おかげで儀三郎の貸付額は倍増した。不況期も貸金は利を生み、山の木は育った。彼は第五巻では貸金がこげつくと遠慮なく裁判所に頼んで差押えもやっており、代言人(弁護士)の手もかりた。借り手がふえ、金額も多くなると人情主義ではすまなくなる。彼は不況を逆手にとって家産を増殖した。いや困窮者がよってたかって金持をつくったと言うべきであろう。しかも政府はそうした事態を助長した。政府の増税策は酒・タバコの税を倍増し、20年に新設した所得税も均等10パーセントの税率であった。これは大衆に重く金持にとっては低いハードルでしかなかった。

おわりに

明治期の日本は日清・日露の二つの帝国主義戦争に勝ちぬき国威は上がった。イエとムラしか知らなかった人々がその上にクニのあることを知った。後から出てきたクニはイエ・ムラを家来のごとく従えた。しかし戦勝によって国民の生活水準が向上したわけでも、暮らしが楽になったわけでもなかった。産業構造は依然として第一次産業中心で明治期を通じ地主・小作制は進行した。クニの人口が増えた分だけ小作人も増えた。イエとムラは懸命にクニを追いその面子により添おうとした。しかしイエもムラもそのメンバーの個が充足した状態になるには程遠かった。心身ともに貧しかった。こうした内部矛盾に覚めた目をむける者は殆どなく、この島国人は東洋の先覚民族という錯覚・慢心に捉えられ、空疎な精神主義が横行した。

戦勝の後遺症は深刻だった。日露戦争によって得た大陸の利権は絶対であり、この保持・拡大が国策を考える上での至上命令となって合理的思考をめぐらそうとする人々の手足をしばった。この時点で健全で考え深い人々の多くがひっこんだ。

軍部の青年将校たちは昭和維新などと称え財閥・政党政治家の腐敗を攻撃し、娘を売る東北農民の悲惨な暮らしを言いたてた。彼等はクニがかかえたイエ・ムラの矛盾をイチかバチかの戦争をしかけることによって一挙に解決しようとした。国の進路にはいろいろな選択肢があったのにあえて最悪の道を選んでしまった……以上は全く私のぼやきで、歴史の後知恵である。「儀三郎日記」全五巻のどこを探しても天下国家を論ずる言葉はない。儀三郎は実践において明治の国策に忠実であり、その上に乗って振舞った。それが黒山家の致富と無縁でなかった。



黒山家墓地全景 (戸倉屋竹 普光寺)